

FE 富士電機スーパーコンサート

75 BRSO

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks

Sir Simon Rattle, Chefdirigent

Japan Tour 2024

75 BRSO

人のいるところには
夢がいる。



JAPAN ARTS

バイエルン放送交響楽団

首席指揮者: サー・サイモン・ラトル

2024年 日本公演



ごあいさつ



「富士電機スーパーコンサート バイエルン放送交響楽団2024年日本公演」にご来場いただきまして誠にありがとうございます。

当社創業のルーツであるヨーロッパのオーケストラの素晴らしい演奏をお届けしたいという思いから、1996年より協賛を続けてまいりました。四半世紀にわたる協賛に際し、関係者皆様のご支援ならびにクラシック音楽ファンの皆様に深く感謝申し上げます。

バイエルン放送交響楽団はミュンヘンを拠点に、今年創立75周年を迎える名門のオーケストラです。昨年、首席指揮者に就任したサー・サイモン・ラトルとの共演は世界中から注目を集めており、日本での記念すべき初公演となります。ヨーロッパ最高峰の演奏をどうぞごゆっくりお楽しみください。

富士電機株式会社

代表取締役会長 CEO

北澤通宏

代表取締役社長 COO

近藤史郎

F 富士電機スーパーコンサート

75 BRSO

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks

Sir Simon Rattle, Chefdirigent

Japan Tour 2024

バイエルン放送交響楽団

首席指揮者: サー・サイモン・ラトル

2024年 日本公演



© BR-Astrid Ackermann



© BR-Astrid Ackermann

バイエルン放送交響楽団 首席指揮者:サー・サイモン・ラトル

2024年 日本公演

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks Sir Simon Rattle, Chefdirigent

Japan Tour 2024

11月26日(火) 19:00 東京 サントリーホール

November 26 Tue. 19:00 Tokyo Suntory Hall

ブラームス:ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 Op.83 [ピアノ:チョ・ソンジン]

J. Brahms: Piano Concerto No.2 in B-flat major, Op.83 [Piano: Seong-Jin Cho]
第1楽章:アレグロ・ノン・トロppo 1st Mov.: Allegro non troppo
第2楽章:アレグロ・アパッシオナート 2nd Mov.: Allegro appassionato
第3楽章:アンダンテ 3rd Mov.: Andante
第4楽章:アレグレット・グラツィオーソ 4th Mov.: Allegretto grazioso

ブラームス:交響曲第2番 ニ長調 Op.73

J. Brahms: Symphony No.2 in D major, Op.73
第1楽章:アレグロ・ノン・トロppo 1st Mov.: Allegro non troppo
第2楽章:アダージョ・ノン・トロppo 2nd Mov.: Adagio non troppo
第3楽章:アレグレット・グラツィオーソ [クワジ・アンダンティーノ] 3rd Mov.: Allegretto grazioso [Quasi andantino]
- プレスト・マ・ノン・アッサイ - Presto ma non assai
第4楽章:アレグロ・コン・スピリト 4th Mov.: Allegro con spirito

11月27日(水) 19:00 東京 サントリーホール

November 27 Wed. 19:00 Tokyo Suntory Hall

リゲティ:アトモスフェール

G. Ligeti: Atmosphères

ワーグナー:歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

R. Wagner: "Lohengrin" Prelude to Act 1

ウェーベルン:6つの小品 Op.6

A. Webern: Six Pieces for Orchestra Op.6

ワーグナー:楽劇「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と愛の死

R. Wagner: "Tristan and Isolde" Prelude and Isolde's Liebestod

ブルックナー:交響曲第9番 ニ短調 (コールス校訂版)

A. Bruckner: Symphony No.9 in D minor (Cohrs critical edition)
第1楽章:荘厳に、神秘的に 1st Mov.: Feierlich, misterioso
第2楽章:スケルツォ、動きをもって、生き生きと - トリオ、急速に 2nd Mov.: Scherzo. Bewegt, lebhaft - Trio. Schnell
第3楽章:アダージョ、ゆっくりと、荘厳に 3rd Mov.: Adagio. Langsam, feierlich

主催:ジャパン・アーツ

特別協賛:富士電機株式会社

後援:ドイツ連邦共和国大使館/駐日韓国大使館 韓国文化院



サー・サイモン・ラトル指揮バイエルン放送交響楽団 2024年日本公演

11月23日(土・祝) 西宮 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール 主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター
11月24日(日) 川崎 ミューザ川崎シンフォニーホール 主催:ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ) ★
11月26日(火) 東京 サントリーホール 主催:ジャパン・アーツ ★
11月27日(水) 東京 サントリーホール 主催:ジャパン・アーツ
11月28日(木) 東京 NHKホール 主催:NHK、NHKプロモーション
11月29日(金) 名古屋 愛知県芸術劇場 コンサートホール 主催:中京テレビ放送
★ チョ・ソンジン

サー・サイモン・ラトル

(首席指揮者)

Sir Simon Rattle, *Chefdirigent*

納得のカリスマ性、優れた実験精神と熱意、そして妥協を許さない真摯な芸術性—これらすべてが、リヴァプール出身のサイモン・ラトルを、現代で最も魅力的な指揮者の一人にしている。2010年、サー・サイモン・ラトルはシューマンの「楽園とペリ」で初めてバイエルン放送合唱団及び交響楽団の指揮台に立った。それ以来、集中的なコラボレーションが展開され、ミュンヘンでの公演は常に目玉として注目されている。

2021年にラトルとバイエルン放送交響楽団は、2023/24年シーズンからラトルが首席指揮者に就任する契約を締結し、相思相愛による結束を果たした。こうして、ドイツのパスポートを持つ69歳のイギリス人は、昨年の9月、若い頃から憧れていたオーケストラを率いる立場となった。就任以前と変わらず、ラトルはラモー、バッハ、ハイドン、モーツァルトから近現代の音楽、古典の交響曲から演奏会形式によるオペラまでの幅広いレパートリーを披露しており、またBRSO(バイエルン放送交響楽団)でも「歴史的情報に基づく演奏(HIP)」という名のもと、ペリオド楽器による古楽の演奏も確立する予定である。さらに、ラトルは音楽教育にも情熱を注いでおり、BRSOアカデミーやバイエルン州立ユース・オーケストラとの野心的なプロジェクトは、バイエルンの金管アンサンブルをBRSOと共演させるイベント「Symphonic Hoagascht」と同様に彼にとっての優先事項となっている。

ラトルは、バーミンガム市交響楽団でその素晴らしいキャリアを開始し、1980年から1998年にかけて同楽団を世界的な名声へと導いた。2002年から2018年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者、2017年から2023年までロンドン交響楽団(LSO)の音楽監督を務め、同団とは今後も名誉指揮者として関係を維持していく。そのほかエイジ・オブ・インライトンメント管弦楽団のプリンシパル・アーティスト、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の第1客演指揮者を務め、ウィーン・フィル、ベルリン・シュターツカペレなどのトップ・オーケストラや、英国ロイヤル・オペラ、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、エクサンプロヴァンス音楽祭といった著名なオペラハウスや音楽祭とも長年の関係を保持している。また最近では、マーラー室内管弦楽団ともコラボレーションを行った。

これまでに数々の栄誉に輝いており、BRSOと録音したマーラーの「交響曲第9番」は、ディアパソン・ドール及びグラモフォン誌のエディターズ・チョイスに選出され、マーラーの「交響曲第6番」ではグラモフォン誌のエディターズ・チョイス及びドイツ批評家賞を受賞している。

© BR-Astrid Ackermann

Sir Simon Rattle



バイエルン放送交響楽団

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks

バイエルン放送交響楽団は、1949年にオイゲン・ヨッフムによって創設されて以来、瞬間に世界に名を轟かすオーケストラへと発展した。その名声は、ラファエル・クーベリック、コリン・デイヴィス、ロリン・マゼールといった首席指揮者たちの功績により、さらに広く認められ、確実なものとなった。2003年10月より、団員の圧倒的サポートによって選ばれたマリス・ヤンソンスが首席指揮者に就任。2019年に逝去するまでの16年間にわたり、極めて高い芸術的水準を維持しつつ、団員との親密な関係を創り出した。そして2023/24年シーズンからサー・サイモン・ラトルが第6代首席指揮者に就任し、新しい時代が始まった。

1945年に作曲家のカール・アマデウス・ハルトマンが創設した音楽イベント(ムジカ・ヴィーヴァ)を継承し、バイエルン放送響は、古典やロマン派のレパートリーの育成とクラシックの再解釈を追求する一方、現代音楽も重要な課題として取り組んでいる。イーゴリ・ストラヴィンスキー、ダリウス・ミヨー、より最近では、カールハイント・シュトックハウゼン、マウリシオ・カーゲル、ルチアーノ・ベリオ、ペーテル・エトヴェシュといった現代作曲家たちの作品を擁護することは、創設当初より同楽団の重要な使命の一つとなっており、こうした作曲家の多くが自ら指揮台に立った。

創立以来、エーリヒ・クライバー、カルロス・クライバー、オットー・クレンペラー、レナード・バーンスタイン、ゲオルク・ショルティ、カルロ・マリア・ジュリーニ、クルト・ザンデルリンク、ヴォルフガング・サヴァリッシュらが客演指揮者として足跡を残してきた。今日では、ヤニック・ネゼ＝セガン、リッカルド・ムーティ、ヘルベルト・ブロムシュテット、フランツ・ウェルザー＝メスト、ダニエル・ハーディング、イヴァン・フィッシャーらが重要なパートナーとなっている。

同楽団は、定期的にヨーロッパのほぼ全ての国、アジア、北米、南米各地を訪れている。なお、2018年のズービン・メータの指揮による日本公演は、音楽評論家たちの投票で2018年のベスト・コンサートに選ばれた。また、2004年よりルツェルン復活祭音楽祭のレジデンス・オーケストラも務めている。

メジャー・レーベルよりリリースされたCDは相当数に上り、2009年からはバイエルン放送の自主制作レーベル“BR-KLASSIK”でもCDやDVDが制作されている。幅広い録音活動によりグラミー賞(2006年)を含む受賞も多数。ラトルとは就任前よりマーラーやワーグナー作品を含む画期的な録音を行い、その多くが国際的な賞を受賞。最近では、マーラーの交響曲第9番の録音がディアパソン・ドール(2023年)を受賞している。

なお2023年には、クラシックの世界的ウェブサイトのひとつBachtrackにおいて、国際的に著名な音楽評論家が選定する「世界で最も偉大なオーケストラ」で第3位を獲得した。

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks



© BR-Astrid Ackermann

チョ・ソンジン (ピアノ)

Seong-Jin Cho, Piano

圧倒的な才能と生来の音楽性を持つチョ・ソンジンは、同世代の最も優れた才能を持つひとりとして、また現在の音楽界における最も異彩を放つアーティストとして名を成している。思慮深く詩的で、堂々としながらもやさしく、また極めてヴィルトゥオーソ的で色彩豊かな演奏は、貫禄と純粋さを兼備し、見事なバランス感覚によって生み出されている。

1994年ソウル生まれ。6歳でピアノを始め、11歳で初めて観客の前でリサイタルを行う。2009年浜松国際ピアノコンクールで最年少優勝。2011年に17歳でチャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。2012～15年にはパリ音楽院でミシェル・ベロフに学ぶ。

2015年にショパン国際ピアノコンクールで優勝。国際的な脚光を浴び、瞬間にキャリアを高める。翌年にドイツ・グラモフォンと専属契約を締結。2023年、クラシック音楽界への格別の貢献を認められ、サムスン湖厳賞を受賞。



© Christoph Köstlin_Deutsche Grammophon

これまでに、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ニューヨーク・フィル等、世界有数の一流オーケストラと多数共演。指揮者ではチョン・ミョンフン、グスターボ・ドゥダメル、アンドリス・ネルソンス、サー・サイモン・ラトル等と定期的に共演している。

2024/25年シーズンは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のアーティスト・イン・レジデンスに就任。ベルリン・フィルハーモニーにおいてシーズンを通して協奏曲、室内楽、リサイタルのプロジェクトを行う。そのほかにも、ロンドンのBBCプロムス、ヤニック・ネゼ＝セガン指揮/フィラデルフィア管のシーズン開幕公演に出演し、サントゥ＝マティアス・ロウヴァリ指揮のニューヨーク・フィルとシカゴ響、フランツ・ウェルザー＝メスト指揮/クリーヴランド管と共演。国際的なツアーでは、アンドリス・ネルソンス指揮/ウィーン・フィルの韓国ツアー、そしてミュンヘンでの公演を皮切りとしたサイモン・ラトル指揮/バイエルン放送響の韓国、日本、台湾ツアー(今回)にも参加する。

また、コンサートヘボウ、ウィーン楽友協会、ヴェルビエ音楽祭等、世界の権威あるホールや音楽祭で多くのリサイタルを行っている。今シーズンには、ウィーンのコンツェルトハウス、ハンブルクのエルプ・フィルハーモニー、ロンドンのバービカン・センター、カーネギー・ホールを含む会場で、ラヴェルのピアノ作品全曲演奏を行う予定である。

最新の録音は2025年1月リリース予定の「ラヴェル: ソロ・ピアノ作品全集」。2023年2月の「ヘンデル・プロジェクト」、2020年5月の「さすらい人」、2021年8月のロンドン響とのショパン: ピアノ協奏曲第2番及びスケルツォ集など、これまで全ての録音をドイツ・グラモフォンからリリースしている。

Seong-Jin Cho



Program Notes

寺西 基之(音楽評論家) Motoyuki Teranishi

ブラームス:ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 Op.83

ヨハネス・ブラームス(1833-97)の残した2曲のピアノ協奏曲は、どちらも高度な技巧が要求されるピアノ独奏と雄弁な管弦楽とが緊密に結び付いた大作だが、若い時の第1番が青年期特有の情熱を吐露した疾風怒濤的な曲であるのに対し、1881年に完成された本日の第2番はいかにも円熟期の所産らしく、堂々とした重厚な作風を示している。一方でそうした重厚さの中にしばしば南国的な明るさが窺われるのは、作品の最初の構想がなされた1878年のイタリア旅行が関係しているともいわれる。

特徴的なのは協奏曲でありながら交響曲風の4楽章構成をとっている点で、そのためしばしば“ピアノ独奏付きの交響曲”とも呼ばれている。楽章構成ばかりでなく、楽章間の動機的関連性や全体の綿密な論理性の点でも交響曲を思わせるものがある。その一方、第3楽章におけるチェロ独奏を導入した室内楽風の書法も注目される。もちろん協奏曲らしく独奏の名技性も追求されており、実際ピアノの技巧面でこの作品は古今のピアノ協奏曲における屈指の難曲として知られている。

第1楽章(アレグロ・ノン・トロppo)はホルン独奏で始まる壮大なスケールのソナタ形式楽章。第2楽章(アレグロ・アパッシオナート)はスケルツォ楽章で、情熱的な第1主題と叙情的な第2主題を持つ。トリオは民俗舞曲風。第3楽章(アンダンテ)はチェロ独奏が加わる叙情的な緩徐楽章で、主題はのちに歌曲「わが微睡はいよいよ浅く」に用いられた。また中間部のクラリネットの旋律は歌曲「死への憧れ」からの引用である。第4楽章(アレグレット・グラツィオーソ)は軽妙な主題を中心に明朗な発展をみせる。

ブラームス:交響曲第2番 ニ長調 Op.73

よく知られているようにブラームスは最初の交響曲を生み出すのに約20年もの歳月をかけた。ベートーヴェンの交響曲ジャンルでの偉業を強く意識していたことで、初めての交響曲の作曲には慎重になってしまったのだった。しかしひとたび交響曲第1番を1876年に完成させると、肩の荷がおりたかのように翌年6月に南オーストリアの避暑地ペルチャッハで次の交響曲第2番に着手、秋には早くもそれを完成させる。作風の点でもこの第2番は、厳しいまでの

緊迫感に満ちた第1番とは対照的に、あたかもふっきた心を表すかのような明るさを示すとともに、ペルチャッハの自然を喚起させる穏やかな叙情に満ちている。そのためあってこの作品はしばしばブラームスの「田園交響曲」とも呼ばれてきた。しかしその明るさの中には、時に孤独な寂しさを示すような暗い陰りや悲劇的な感情も織り込まれ、それがこの作品にロマン的な奥行きを与えている。

こうした伸びやかな特質の一方、全体は緻密な論理的書法で構築されており、とりわけ第1楽章冒頭で低音に示されるD[ニ]-Cis[嬰ハ]-Dの動機は作品を統一する基本動機となっている。主題の展開の仕方も徹底しており、細部に至るまで隙のない造形がなされている点がブラームスらしい。

第1楽章(アレグロ・ノン・トロppo)はホルンの牧歌的な第1主題と、チェロおよびヴィオラが歌う叙情的な第2主題を持つソナタ形式で、展開部で大きな頂点が築かれる。第2楽章(アダージョ・ノン・トロppo)はチェロが歌い紡ぐ寂しげな主題に始まる。内面感情を綴った味わい深い緩徐楽章である。第3楽章(アレグレット・グラツィオーソ[クワジ・アンダンティーノ])ではのどかな主題と躍動的なエピソードが交替する。第4楽章(アレグロ・コン・スピーリト)は喜びが溢れるソナタ形式のフィナーレで、コーダの高揚感は圧倒的なものがある。

リゲティ:アトモスフェール

ジェルジ・リゲティ(1923-2006)はハンガリー出身だが、1956年のハンガリー動乱の際に西側に亡命し、以後前衛の先端を行く作曲家のひとりとして、様々な新しい実験的な手法を用いながら先鋭な響きの世界を追求した。亡命後に彼が開拓した重要な手法のひとつがマイクロポリフォニーで、細微かつ複雑な多声的動きの絡み合わせによって微妙で錯綜した響きの変化と綾を生み出すこの手法は、この時期の代表作である大管弦楽のための「アトモスフェール」(1961年)に如実に生かされている。伝統的な旋律やリズムや和声といった要素は影を潜め、多声部の密集が生み出すトーンクラスター(音塊)の流れが静寂から大音量までのダイナミクスの変化に結び付いて、絶えず推移する多様な響きの時空間を作り出す4管編成の作品で、スタンリー・キューブリック監督の映画《2001年宇宙の旅》にも用いられて有名になった。

ワーグナー: 歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

「ローエングリン」(1848年完成)はリヒャルト・ワーグナー(1813-83)が“オペラ”と銘打った最後の作で、以後彼が追求する新しい音楽劇(楽劇)の特徴を様々な点で先取りしている。中世の“白鳥の騎士”伝説に基づいて彼自身が作った台本の物語は、聖杯騎士ローエングリンが弟殺しの無実の罪を着せられたエルザ姫を救うために出現して彼女と結婚するが、ローエングリンの素性を問わないという約束をエルザが破ったために自分の身分を明かして去っていく、というもの。第1幕への前奏曲は超越的存在であるローエングリンの出現を象徴する神秘的な弱音で始まり、神々しい麗な頂点を築き上げた後、再び最弱音の中へ消えていく。

ウェーベルン: 6つの小品 Op.6

アントン・ウェーベルン(1833-1945)は無調の技法を推し進めた新ウィーン楽派のひとりだが、この楽派の中でも特に先鋭な作風を示し、極小形式といわれる極度に切り詰めた集約的な音の動きによるきわめて短いスタイルを追求した。そうしたスタイルは無調の技法を確立して間もない1909年に4管編成の大管弦楽のために書かれた「6つの小品」にすでに如実に示されている。6曲併せても演奏時間10分強という短さのうちに、音色旋律を取り入れ、曲ごとに編成を変えるなど、多彩で高密度の音世界を現出させた作品で、後年の1928年には彼自身の手で2管編成用に縮小した改訂版も作られた。作品には標題は付されていないものの、彼はシェーンベルク宛の手紙や改訂版の演奏に際してのコメントで1906年の母親の死が作曲の背景にあることを明らかにし、母の死の予感(第1曲)、現実になった母の死(第2曲)、棺の上のエリカの花の香り(第3曲)、墓地に向かう葬送の歩み(第4曲)、回想と諦念(第5、6曲)といった標題的な説明をしている。

ワーグナー: 楽劇「トリスタンとイゾルデ」より 前奏曲と愛の死

オペラ史に革命をもたらしたワーグナーの楽劇の中でも特に革新的なのが「トリスタンとイゾルデ」(1859年完成)で、死によってしか成就できないトリスタンとイゾルデの宿命的な愛を無限旋律と半音階的な和声法といった斬新な

語法で表現した楽劇である。“前奏曲”にはそうしたこの楽劇の特徴が端的に現れており、不協和音の解決を引き伸ばしていくことで満たされない愛を描く語法(いわゆるトリスタン和声)は、伝統的な機能と声法を崩壊に導く契機ともなった。一方“愛の死”は、トリスタンの遺体を前にイゾルデが愛の成就としての死について陶酔のうちに歌うこの楽劇の終結部分の音楽で、転調の連続が生み出す大きなうねりのうちに法悦感を高め、トリスタンとの永遠の合一(=死)を示す和音で幕となる。本日のようにイゾルデの歌唱を省いて管弦楽だけで演奏されることも多い。

ブルックナー: 交響曲第9番 ニ短調

19世紀後半に独自の大規模なスタイルによる交響曲を生み出したオーストリアの作曲家アントン・ブルックナー(1824-96)だが、後期の第7~9番では彼独自の書法がさらに新たな円熟の境地を見出し、超越的な精神の高みを築き上げている。とりわけ本日の第9番は未完で残されたものの、彼が最後に到達した高みともいべき深遠な神秘性を持った傑作だ。1887年に着手されたが、第8交響曲の改作や他の旧作の交響曲の改訂のために中断、本格的な創作に取り掛かるのは1891年頃となり、1894年11月30日までにアダージョの第3楽章までが完成された。その後終楽章に力を注ぎ、健康が悪化する中で死の日(1896年10月11日)まで作曲が続けられたものの、結局完成されることはなかった。近年では残されたスケッチに基づく終楽章の補筆版も作られているが、従来のようにブルックナーが完成させた3つの楽章のみを演奏するのが今も一般的で、本日も3楽章版(コールス校訂版)で演奏される。

第1楽章(荘厳に、神秘的に)は厳粛な気分の中に暗く深遠な世界が広がる劇的なソナタ形式楽章である。第2楽章(スケルツォ、動きをもって、生き生きと)はリズムミクなスケルツォで、原初的なリズムの鳴動とも死の舞踏ともとれる不気味な雰囲気を持っている。第3楽章(アダージョ、ゆっくりと、荘厳に)は深い感動を呼び起こす緩徐楽章で、大きな起伏のうちに内面的な高揚を示していき、最後は浄化するような清澄な終結に至る。



Sir Simon Rattle

1月19日、サイモン・ラトルはリヴァプールに生まれた。当初はクラシックではなくジャズに影響を受ける。リズム感が強く、最初買ったドラムセットは壊すまで叩いた。マージサイド青少年オーケストラのリハーサルを聞いた際も、彼は指揮者ではなく、ティンパニを叩く少年に特に魅了されている。

20世紀のクラシック作品のレコードを聴くことが大好きな姉がいて、母親に楽譜の読み方を教わった。この年、ハウス・ラティで日曜コンサートを主催し、「Music for Frustrated Conductors(イライラした指揮者のための音楽)」シリーズのレコーディングのために、初めて指揮棒を手にするのである。

ロンドンの王立音楽院でピアノ、打楽器、指揮を学ぶ。

ボーンマス交響楽団およびシンフォニエッタのアシスタント指揮者を務める。

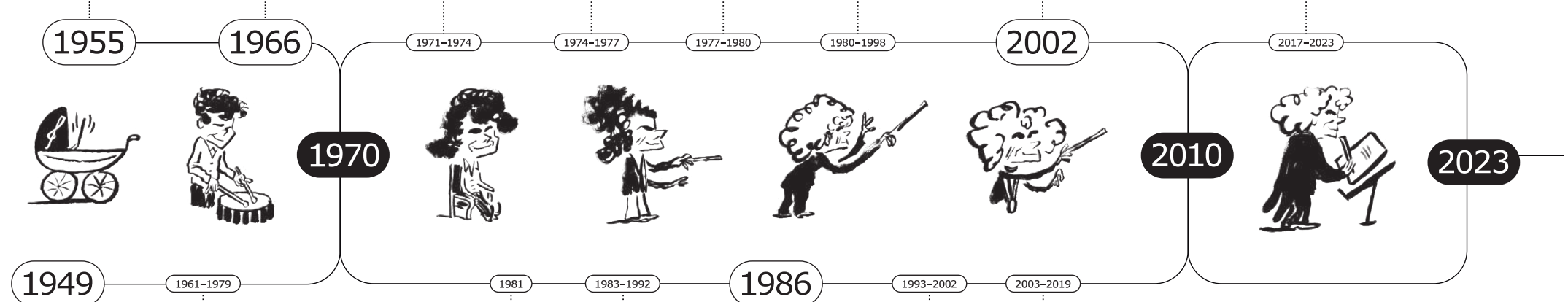
BBCスコティッシュ交響楽団およびロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団の首席アシスタントを務める。

バーミンガム市交響楽団の首席指揮者を務める。

女王から「ナイト・バチエラー」の称号を授与される。また同年、3,889人の演奏家が参加したバーミンガム市交響楽団のコンサートで「最も多くの演奏者が参加したオーケストラ演奏」としての世界記録を打ち立てた。同年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者兼芸術監督に就任。以来、2018年まで16年間にわたりベルリン・フィルを率いた。これはマリス・ヤンソンスがバイエルン放送交響楽団(以下BRSO)に在籍していたのと同じ期間である。

ロンドン交響楽団音楽監督を務める。

音楽の中にある永久不滅の精神：コロナ禍のさなか、2021年1月3日にサイモン・ラトルはBRSOとの契約にサインをした。2023/24シーズンから、亡きマリス・ヤンソンスの後任者として楽団を率いることを決意したのだ。この時代の転換期を、ラトルは次のように語っている。「人はやって来ては去るが、精神は残る。」



BRSOが7月1日に設立され、1960年まで伝説的なブルックナーの大家、オイゲン・ヨッフムが礎を築き上げた。1955年、ラトル誕生の年にBRSOは初のコンサートツアーを行う。この海外ツアーがのちのオーケストラの世界的名声につながった、とヨッフムは語っている。

ラファエル・クーベリックがBRSOを18年率いる。これは首席指揮者としての最長記録である。

リヴァプールにおいて、BRSOがクーベリックの指揮でベートーヴェン交響曲第9番を演奏。その客席にサイモン・ラトルがいた。このコンサートは当時15歳の少年にとって指標となる。同年、彼は初めて交響楽団を指揮する。その活動に対する情熱はリヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団の音楽家の知るところとなり、ラトルはリヴァプール・フィルの団員や音楽監督から指揮のアドバイスを受けるようになる。デイリー・テレグラフ紙は「サーカスリングのような雰囲気」と称し、彼の偉大な未来を予告している。

キリル・コンドラシンが首席指揮者に選出されるが、就任前に急逝。

情熱的で、愛想が良く、気取らず卓越した人物。「紳士的な指揮者」として有名だったサー・コリン・デイヴィスの時代。

ハイドンのオラトリオ「天地創造」は、ウィーンでの初演から2年後の1801年にバイエルン州オットーポイレンで初演され、その後ハイドンの没年1809年にも再演された。この曲は1946年、同地で第二次大戦後に演奏された最初の曲でもある。1986年には、レナード・バーンスタイン指揮BRSOによって演奏されたことも人々の記憶に残っている。2023年、BRSOの首席指揮者に就任したサイモン・ラトルはこれらの歴史に敬意を表して、オットーポイレンでこのオラトリオを演奏した。

ロリン・マゼールがその手腕によってBRSOの音楽的能力を飛躍的に発展させた時代。

「彼らは全ての演奏会を最後のコンサートであるかのように演奏する。指揮者である私にとってはまるでロールスロイスに乗っているようなものだ。このオーケストラは本当に何でもできるんだ」—マリス・ヤンソンス。

最初の出会ってから40年後、サイモン・ラトルが初めてBRSOの前に立った。当時のメンバーはほんのひと握り。彼らはラトルが愛するシューマンの「楽園とベリ」を演奏し、ラトルはクーベリックが築き上げた精神と音をオーケストラから感じた。

オーストリアの漫画家ニコラス・マラーはロミー・シュナイダーやトーマス・ベルンハルトなどの要人たちを、アイコニックなスタイルで描くのが好きな作家だ。サイモン・ラトルを描く際には、フランツ・カフカ風に取り組んだという。

イラスト：Nicolas Mahler

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks

Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks

Chefdirigent / Chief conductor

Sir Simon Rattle

1. Violine / 1st Violin

Radoslaw Szulc *
Anton Barakhovsky *
Tobias Steymans *
Thomas Reif *
Savitri Grier
Julita Smoleń
Peter Riehm
Corinna Clauser-Falk
Franz Scheuerer
Michael Friedrich
Andrea Karpinski
Daniel Nodel
Marije Grevink
Nicola Birkhan
Karin Löffler-Hunziker
Anne Schoenholtz
Daniela Jung
Andrea Eun-Jeong Kim
Stefano Farulli
Fabian Jüngling

2. Violine / 2nd Violin

Korbinian Altenberger *
N.N.*
Alexander Kisch
Yi Li
Angela Koeppen
Leopold Lercher
Key-Thomas Märkl
Bettina Bernklau
Valérie Gillard
Stephan Hoever
David van Dijk
Susanna Baumgartner
Celina Bäumer
Amelie Böckheler-Kharadze
Lorenz Chen
N.N.

Viola

Hermann Menninghaus *
Emiko Yuasa *
N.N.*
Benedict Hames
Giovanni Menna
Anja Kreynacke
Mathias Schessl
Klaus-Peter Werani
Christiane Hörr-Kalmer
Véronique Bastian

Alice Marie Weber
Elisabeth Buchner
Christa Jardine
N.N.

Violoncello

N.N.*
N.N.*
N.N.*
Hanno Simons
Eva-Christiane Laßmann
Jan Mischlich-Andresen
Uta Zenke-Vogelmann
Jaka Stadler
Frederike Jehkul-Sadler
Samuel Lutzker
Katharina Jäckle
Sayaka Selina Studer

Kontrabass / Double Bass

Philipp Stubenrauch *
Wies de Boevé *
José Sebastião Trigo
N.N.
Piotr Stefaniak
Teja Andresen
Lukas Richter
David Santos Luque
Naomi Shaham

Flöte / Flute

Henrik Wiese *
Lucas Spagnolo *
Petra Schiessel
Natalie Schwaabe
Ivanna Ternay

Oboe

Stefan Schilli *
Ramón Ortega Quero *
Tobias Vogelmann
Melanie Rothman
Emma Schied

Klarinette / Clarinet

Stefan Schilling *
Christopher Patrick Corbett *
Bettina Faiss
Werner Mittelbach
Heinrich Treydte

Fagott / Basson

Marco Postinghel *
N.N.*
Susanne Sonntag
Francisco Esteban Rubio
Jesús Villa Ordóñez

Horn

Carsten Carey Duffin *
Pascal Deuber *
Ursula Kepser
Thomas Ruh
Ralf Springmann
Norbert Dausacker
François Bastian

Trompete / Trumpet

Martin Angerer *
N.N.*
Wolfgang Läubin
Thomas Kiechle
Herbert Zimmermann

Posaune / Trombone

Felix Eckert *
N.N.*
Uwe Schrodi
Thomas Horch
Lukas Gassner
Csaba Wagner

Tuba

Stefan Tischler *

Pauke / Timpani

Raymond Curfs *
N.N.*

Schlagwerk / Percussion

Guido Marggrander
Christian Pilz
Jürgen Leitner

Harfe / Harp

Magdalena Hoffmann *

Tasteninstrumente / Keyboard instruments

Lukas Maria Kuen *

* Konzertmeister*innen, Stimmführer*innen, Solo

* Concertmasters, Principals, Soloists



【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

寄せられたご支援は、アーティストの様々な活動に幅広く使わせていただいております。

「人のいるところには夢がある」創業49年来のジャパン・アーツの理念です。

どんな時代においても、音楽・芸術から生まれる感動は、

人々に夢・希望・生きる力を与えてくれます。

これまでの活動レポートは、ジャパン・アーツのホームページに

掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

今年度も変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



アーティストサポートの詳細は
こちらをご覧ください。

2024年度ご支援いただいた皆様

<2024年度 年間サポート>

朝妻 幸雄 F.A 井上 豊 岩村 和央 上原 啓子 上村 憲裕 M.U K.O S.O 小田島 容子
片山 由美子 H.K K.K 栗田 美知子 新貝 康司 M.S M.T R.T A.D 田中 治郎 FT
トゥルーラブ 真智子 トゥルーラブ 真凛 K.N E.N 児子 弥生 S.N 長谷川 智子 T.H 樋口 美枝子
M.H 平山 美由紀 藤野 盾臣 松尾 芳樹 真野 美千代 三木谷 晴子 J.M M.M

株式会社青林堂 株式会社セキド 三井住友カード株式会社

株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション

ライフプラン株式会社 Heart of the Earth株式会社 きづきアセット株式会社 (匿名希望 26名)

<2024年度 福岡 洗太朗に「花を贈ろう！」>

あかほり みお 厚見 有紀 J.A 池田 惇子 石黒 裕康 石崎 典子 井住 智子 R.I A.I
岩塚 究 K.U M.E 猿渡 かおり M.E 大畑 篤子 大原 志津子 大原 みずほ 小山田 美代子
カッキー 柿 信子 柏 香織 T.K 川島 理絵 駒場 雅世 A.K 桜猫 桜井 桂子 佐々木 珠乃 佐野 孝枝
A.S N.S 塩崎 勢子 W.S A.S 新里 真美子 進導 幸太郎 鈴木 志保里 N.S 早田 利江 高島 秀子
鷹巣 綾子 高田 恵子 N.T 武田 眞子 武田 佳美 辻田 奈津 土屋 麻起 長江 雅子 中嶋 妙子 Y.N
中島 葉子 S.N 中村 祥子 A.N K.N H.N 林 順子 平井 聖香 平山 美由紀 深堀 悦代 S.F
伏見 由加 A.H R.M 松尾 桂子 三浦 祐子 三浦 洋子 村田 恵美 村山 幸恵 山口 恵美 依田 晴美
(匿名希望 23名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 オフタイム・サポート>

井口 和美 K.K Rimiko M.H M.M 真野 美千代 水足 久美子 水足 秀一郎 ロロコミ・リリコミ
(匿名希望 12名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 ツアー・サポート>

井口 和美 T.O K.K Rimiko M.T 平山 美由紀 細沼 康子 M.M 真野 美千代 村瀬 治男
ロロコミ・リリコミ (匿名希望 11名)

2024年11月7日現在 敬称略

ご支援についての詳しい内容は、株式会社ジャパン・アーツ
お気軽にお問い合わせください。アーティストサポート係 TEL.03-3499-7720(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

パワーエレクトロニクスを 社会のちからに、優しさに。

サステナブルな社会の実現に貢献